

## “考えるサッカー”に 挑戦!

「一歩ずつ前進していると思う」。前期を振り返っての廣井の言葉だ。前期を2位で折り返した駒大だが、前期を戦い抜く中で試行錯誤を繰り返して、その中で成長を遂げた。

開幕戦の相手は2部から昇格してきた専大。“考えるサッカー”を取り入れようと、従来の4-4-2という形から3-3-1にシステム変更し、試合に挑んだ。このシステムの利点は攻撃時にある。前線にスペースが生まれ、3ポランチということから厚みある攻撃が仕掛けられる。この試合では正にそれが生きた。収穫と共に守備面での課題も浮かんだが、開幕勝利を飾った。

第2節の相手は、昨年度の大臣杯、天皇杯予選で苦汁をなめた早大。優勝候補と言われていただけに駒大の選手たちの気合も十分だったはず。しかし、結果は1-1の引き分け。「気持ちを出せなかった」と廣井は気持ちの面での問題を語った。

早大に引き分け、気持ちの面での問題を再確認したはずだった。だが、第3節明大戦でまたしても引き分け。前節であれだけ「気持ち」と言っていたにも関わらず、また同じことを繰り返してしまった。そこには、もしかしたら選手たち本人も気付かぬ王者のこだわりがあったのかもしれない。「おこり、慢心がないようにはずっと言ってきている。これがいい教訓になれば」と秋田監督は語った。

2試合続けてドローという悪い流れを断ち切ったのは第4節東農大戦の島田であった。ボールを持つと果敢に自らドリブルで勝負する。島田は異彩を放ちチームに勝利をもたらした。また、この試合ルーキーの伊藤が公式戦初出場。得意のヘディングで相手の攻撃をシャットアウトした。「1年生が試合に出場することで、チームのレベルが上がればと思う」と頼もしい発言。試合中も積極的に声を出しルーキーとは思えぬほどの存在感を感じさせた。

巻が出場停止、原を怪我で欠いた第5節国土大戦。FWとして先発出場したのは小林と公式戦初スタメンの高崎。開始早々高崎がゴールを上げるとその1分後に廣井が追加点。主力FWを欠いても駒大の戦力は衰えることを知らなかった。

今期唯一の黒星、流経大戦は完敗の一言に尽きる。縦に速い流経大サッカーに翻弄され自分たちの本来のサッカーが出来ない。駒大の一つの武器である巻の高さも、長身DFの密着マークに遭い封じ込まれてしまう。上位チームだけにこの敗戦は痛かった。

## 勝ち点「1」縮まらず...

第8節中大戦では、相手が3トップということから、本来の4バックにする。この試合、駒大の攻撃陣が爆発。巻がハットトリックを決め、竹内も2ゴールの活躍をみせ、1で大勝した。中大戦では、3トップに対して4バックを採用したが、第9節順大戦でも4バック。選手たちが4バックの方がやり易いということから、本来の形に戻したのだ。この試合、怪我の三乗に代わって出場した山内が好セーブを連発し、チームのピンチを救った。

1位流経大との勝ち点差は、1のまま。負けは許されない駒大は、第10節、宿敵筑波大に勝利し前期最終節へ。相手は法大。開始1分、塚本の蹴るCKを東平が頭で反らし巻がヘディングシュート。先制すると、9分にもセットプレーから得点を上げる。オウンゴールで法大に得点をブレイクするも、2-1で勝利した。

流経大との勝ち点差は縮まらぬまま前期を折り返したが、その差はたったの「1」。後期、前期で手にした課題と収穫をどれだけ生かせるか。気持ちの部分で甘さをみせなければ、リーグ連覇の可能性は十分ある。最後までこのリーグ戦を終わらせることを切に願う。

(伊藤優香)



# リーグ戦前期ハイライト